

佐々木高弘 著

『妖怪巡礼』

古今書院 2020年11月 192+viii頁

3,200円+税

本書は、著者単独による「妖怪文化の民俗地理」シリーズの第4巻である。古代や中世の史資料に現れ、現在まで継承された妖怪文化を、地図や景観写真を援用し、具体的な場所を巡りながら地理学的に解説する試みである。

全編を貫く構図は、古代京都における宮中の「大祓」^{おほはらえ}や山城四堺の「道饗祭」^{みちあえのまつり}²⁾とは、一度は地下世界へと追放した災厄とその元凶たる妖怪が、都を目指して毎年逆流するのを阻止する神事であり、各地の国境などにも逆流途上の妖怪が出現する、という世界観である。このような神話的世界観は、朝廷が全国に権力を確立させた過程の反映でもあるという。参照される史資料（多くは現代語訳）は、古事記、日本書紀、風土記、続日本紀、延喜式、平家物語、太平記、御伽草子など多岐にわたる。

本書の内容は、前著と重複する箇所も多いため²⁾、各章の紹介は最小限としたい。冒頭の「はしがき」では、カルチュラル・スタディーズ（以下CS）のレイモンド・ウィリアムズや文化人類学の「文化」概念を参照しつつ、地表面での人間の営為を重視する地理学の観点が強調される。

第1章「妖怪文化を地理学的に考える」では、人文主義地理学の「主体からみた空間」、歴史地理学のヒュー・プリンスの「想像世界」と「抽象世界」、ブリュノ・ラトゥールのアクターネットワーク理論（以下ANT）³⁾、ナイジェル・スリフトの非表象理論non-representational theoryなどに言及しながら、ジョナサン・マードックが指摘する「関係性の空間relational space」⁴⁾として、妖怪文化が展開する空間を捉える基本的視点が示される。

第2章「神話が支える京都の魔界」では、古代の平安京の鬼門封じとしての延暦寺や日吉大社、貴船の鬼の侵入口としての一条戻橋などを題材に、都の人々の空間認識が、ユング心理学の「無意識」の概念や、イーファー・トゥアンによる身体感覚論（南面した際に左後方に位置する北東方向を最も劣位とする認識）を援用して説明される。

第3章「妖怪の正体は？」では、宮中で信じられた妖怪が、天変地異や飢饉・疫病を引き起こす被征服民（先住民）による祟りや、外国の使節がもたらす疫病などへの恐怖の表れであったこと、さらには、天孫降臨前に地上界を支配していた「荒ぶる神」として、大祓の祝詞に登場することが指摘される。

第4章「荒ぶる神の正体」では、抵抗する先住民の象徴であり地下世界の主宰者としてのスサノヲと、その子のオホクニヌシが「荒ぶる神」の典型であることが示され、祟りを起こす先住民の神として、常陸国の夜刀の神とその伝承地が例示される。

第5章「もう一つの荒ぶる神」では、征服者としての天皇家の側にもヤマトタケルという「荒ぶる神」が存在し、記紀ではスサノヲ同様に荒々しく描写されているのに対して、朝廷による征服後の状況を示す出雲や常陸の風土記では、ヤマトタケルもスサノヲも穏やかに描かれていることを見出す。

第6章「荒ぶる神とは先住民の抵抗か」では、常陸・播磨・肥前の諸国を事例に、全国各地の山河や道路に出没する土蜘蛛などの「荒ぶる神」の存在が抽出され、中央の朝廷が欲した地方の抵抗勢力の情報が、風土記の記述に表れていることが示される。

第7章「古代の交通路と根の国底の国」では、都を中心として地方の役所や防衛拠点を結ぶ交通ネットワークが、中央の知識（律令や記紀）の全国への伝達や、地方の情報（風土記など）の収集を意図していたこと、それらの交通路こそが「荒ぶる神」が地上と地下の垂直移動のみならず水平移動することを可能にしていたこと、さらに、その交通路整備の途上で遭遇してきたのが在地の「荒ぶる神」であったことを洞察する。

第8章「中世の鬼、悪路王」では、中世に時代を移し、伝説上の三人の将軍たちの物語を主題として、琵琶湖の瀬田橋、陸奥の達谷窟^{たつこくのいわや}、山城・大和国境（奈良坂）などに出没する妖怪を彼らが討伐した顛末が語られる。

第9章「鈴鹿山そして岩手山の大嶽丸」では、近江・伊勢国境の鈴鹿峠（鈴鹿関）、陸奥国の岩手山、宇治の平等院などを舞台にした伝説が紹介され、交通の要所や征服の最前線では「荒ぶる

神」が頻繁に出現し、数々の妖怪や鬼の伝承もそこに集中してきたことが指摘される。この論点に関しては、民俗地理学で提起された「境の場所」の理論的知見⁵⁾との対応関係も知りたいところである。

第10章「酒呑童子を巡る旅」では、現代に残る伝承などにも触れつつ、京都からは遠方に位置する丹波・丹後国境の大江山、近江・美濃国境の伊吹山（不破関）、越後・佐渡国境の国上山を事例に、中世の鬼である酒呑童子とその伝説が、古代の「荒ぶる神」の性質と神話的世界観を継承していることが提示される。

第11章「玉藻前と宮中、そして那須野」では、中世の宮中に出没した下野・陸奥国境（白河関）近く的那須野の妖狐が、現在も地元で伝承されていることが指摘される。さらに全体の結論として、古代の神話的世界観は、交通ネットワークで結ばれた役所・宗教施設・山河などを舞台とした言説として表現され、また祝詞や儀礼などの実践を通じて再現・反復され、さらに中世に物語化された際には権力と抵抗の闘争空間として局地的に浮上し、現在もなおその痕跡をとどめていることが展望される。

末尾の「あとがき」では、那須野での現地調査のエピソードに触れつつ、妖怪文化とは一見無関係の人・物・場所をネットワーク上で関連づける一つの思考方法であり、このANTの思考こそが現在の分断された世界に必要なことが強調される。

本書の鍵となる概念は、「妖怪文化」「ネットワーク」「関係性の空間」の三つであろう。特にANTの「ネットワーク」概念を用いた説明は、各章で少しずつ表現を変えながら頻出する（ただし、111～113頁の数段落分の記述は、157～159頁のものとは全く同一である）。以下では、この三つの概念の捉え方や適用の仕方について、気づいた内容を概念ごとに分けて述べたい。

第一は、「妖怪文化」の定義の理論的基盤についてである。著者は、CSのウィリアムズの『文化とは』⁶⁾に依拠しながら、①特定の集団の生活様式と精神のあり方、②知的・芸術的活動の作品や実践、という「文化」の2通りの定義のうち、②のみを重視するのではなく、①の生活様式全般を扱うべきであると主張し、妖怪を文化として扱

う発想はCSの浸透の賜物であるとする。しかし、当該書におけるウィリアムズの論点は、このような二分法というよりは、社会秩序の主要素としての文化が産み出される過程であり、政治を含めた社会制度、生産や流通といった経済、生産技術と物的条件など、文化以外の諸要素と文化との関連である。この論点から妖怪文化は、どのように説明できるのであろうか。

また、CSは元来、イギリスの労働者階級の立場から、彼ら自身の文化を研究することを目指してきた⁷⁾。これに対して、古代日本の妖怪文化は、現在の全国各地の民間伝承にも受け継がれているとはいえ、基本的には都の宮中における当時の最上流文化であり、本書でも繰り返し指摘される通り、権力者の立場に基づくものである。妖怪文化をCSの観点から扱う場合には、民俗学で着目されてきた近代の常民の妖怪伝承⁸⁾との関係も含め、統合的な理論的検討が必要となる。

第二は、「ネットワーク」の概念の扱い方についてである。この概念は本書では、古代交通路のネットワーク自体であると読める箇所以外は、アクター（より正確にはアクタント）同士の結びつきの総体（すなわち妖怪文化）を指している。この際のアクターとしては、権力者・先住民・修験者などの人間、記紀神話・祝詞・伝承などの言説、儀式・祭礼・反乱などの行為、宮中・社寺・橋・関所などの場所、道具・供物などの物品、河川・山・洞窟などの自然景観、天候・水流などの自然現象、飢饉・疫病などの出来事といった、極めて多彩な要素が含まれている。

英語圏の地理学では、経済地理学のマードックによる理論的検討⁹⁾などを端緒として、主に1990年代後半からANTの適用が進んだ。日本においても、社会学・経営学・工学など様々な分野で適用が蓄積され¹⁰⁾、近年では地理学でも概要の紹介¹¹⁾や事例への厳密な適用¹²⁾が試みられている。しかし、ラトゥールのANTとは元来、科学論あるいは科学技術論であったことに注意すべきである。我々研究者は学術論文を読む際、本文はもちろん図表の隅々に至るまで批判的に読解する。しかし、その図表のデータがどのように収集され加工されて現前しているのか、通常はその内実まで探ることはできない。研究者以外の人々にとっては、それは尚更であり、科学的知見とされ

るものを、ほぼそのまま受容する以外に術はない。

ラトゥールは、このような科学が作られる過程という「ブラックボックス」の内実を探るために、まず実験室内外の多様な機関や人々（行政・資金援助者・報道機関・学生・同僚科学者など）も科学に動員されていることを指摘する¹³⁾。地理学者も分析対象となった事例では、文化人類学の参与観察の手法を用いて、哲学者の視点から科学者の営為を丹念に追跡し、研究者・標本・器具類・地図・パソコンなど無数の事物が互に関わり合うことによって、フィールドの自然が論文の文字と図表に変換（ANTの定訳では「翻訳」）され知識が産出されていく過程を、極めて詳細に解明している¹⁴⁾。その結果、無数のアクタントを関係づけるネットワークという観点が生まれた。

またラトゥールは、従来の社会学（主にエミール・デュルケム）への批判として、社会に対する影響力（権力power）は特定の主体に予め備わっているわけではなく、アクター¹⁵⁾相互の結びつきの結果として、行為が実際に遂行される中で生じると見なしており¹⁶⁾、これはANTの重要な発想である。さらにラトゥールは、近代社会の基盤である科学技術の批判的検討から、自明視された近現代人の思考方法への批判にも論を展開するが¹⁷⁾、その底流は一貫して科学論であった。

これに対して、先述した日本の各学界におけるANT適用の範型とされるのは、社会学者のミシェル・カロンとジョン・ローの事例研究である。カロンは、フランスの水産養殖を事例に、科学者が新規の技術を広めるためにどのように動き、何がそこで生じるのかを虚心坦懐に観察し、ホタテ貝という人間以外のアクターの働きを見出した¹⁸⁾。つまりラトゥールの研究と同様、研究者の営為を批判的に検討した科学技術論である。他方のローは、大航海時代のポルトガルを事例に、インドに対する遠距離の社会的支配を可能にした要因として、ガレオン船、航海術（器具）、訓練された水夫を挙げ、これらの「人間human」と「非人間non-human」の双方にわたる受動的主体のネットワークを構築できた点を指摘する¹⁹⁾。これも一種の科学技術論であるが、最後にローは、分析に際して人間を過度に重視してきた従来の社会学を明確に批判している。

以上を踏まえると、我々がANTを適用する際

の留意点にいくつか気づく。まず、ANTとは総じて科学論・科学技術論であるという点である²⁰⁾。すなわち、ラトゥール自身が示唆するように²¹⁾、社会全般の分析にまでANTの視点を拡張させることに、どのような意義や利点があるのかを批判的に考える必要がある。無数の人々や事物が互いに複雑に絡み合っ、世の中のあらゆる存在が成り立ち動いている、と改めて指摘することに、果たして何の意義があるのだろうか。

とはいえANTは、主にカロンの枠組に基づいて食品産業を分析した野尻亘の研究のように²²⁾、ある事業が開始されてから現状に至るまでの段階的な過程について、そこに関わる人々や事物を予断なく一つ一つ丁寧に考慮しながら全体の見取図を明確に示す²³⁾、という作業の一助となる意義はあるように思われる。妖怪文化というネットワークを扱った本書の場合、ANTを意識しなければ見逃していた諸要素があった可能性はある。ただし本書は、古代から現代までの千年以上離れた時点間の関連も扱っているが、ANTは複数時点の事象相互の関係については必ずしも体系的には検討しておらず、本書のような歴史地理学では、このような時間軸の精緻な議論も必要であろう。

また、ANTは元来、専ら人間のみを分析対象としていた社会学²⁴⁾に対する批判であった点にも留意すべきである。つまり、ANTを敢えて地理学で適用する意義は何かということである。例えば自然や商品など、人間以外の事物も幅広く扱ってきた地理学から見ると、ANTの文献に頻出する「人間」と「非人間」（人間以外のもの）という対語は少し奇異に映る。人間も自然も含めた様々な事象間の相互関係（因果関係なども含む）の説明については、歴史地理学の一例を挙げれば、千葉徳爾による地域構造図という方法が既に存在する²⁵⁾。この方法では、積雪・災害・獣害などの広義の自然が人間に対して主導的に作用する局面を扱うことも可能である²⁶⁾。このような地理学の利点を放棄してANTを積極的に適用することの意義を、地理学者は熟考する必要がある²⁷⁾。

第三は、「関係性の空間」の具体的内容についてである。本書では、古代から中世さらには現代まで継承された神話の言説の場、神話的世界観の実践によって生成する権力空間、宮中や都と全国各地との知や情報の繋がりなどが、この概念に具

体的に該当するようである。最も広義には、妖怪文化というネットワークが展開する場の全体であると理解し得る。

マードックが言及した「関係性の空間」という考え方では、空間とは、様々な実在と過程が相互に関係し合うことによって絶えず生成して変化し、常に新たな関係が結ばれる開かれた存在である、と把握される²⁸⁾。この視点は、ラトゥールのANT、デヴィッド・ハーヴェイの時空間論²⁹⁾、スリフトの非表象理論などの他、ドリーン・マッシーの空間論³⁰⁾から直接の影響を受けている。しかしながら、マードックが総括するこのような「関係性の空間」という捉え方は、例えば従来の地理学における景観史や空間的相互作用の視点、あるいは社会空間や機能地域概念などと、実質的にどのように異なるのであろうか。地理学は本当に、閉じられた存在あるいは容器 container (すなわち絶対空間)として、主に空間を捉えてきたのだろうか³¹⁾。さらに認識論の面から言えば、例えば応地利明が指摘する、空間を主体と事象との関係性に置換して捉える立場とは、どの程度まで類似性があるのだろうか³²⁾。

また本書では、「関係性の空間」を説明する際に、「流動的で生成し続ける」という表現がしばしば付随するが、これはスリフトの非表象理論が主に念頭に置かれていると思われる。しかし、本書の非表象理論の説明箇所は必ずしも明快ではなく、対応すると思われるスリフトの難解な原文³³⁾からは、かなり翻案されていることが窺える。

スリフトの非表象理論は、1990年代前半までの英語圏の文化地理学における表象分析³⁴⁾への過度の傾倒に対する批判である³⁵⁾。ジェームズ・ギブソンの生態心理学などの影響を強く受け、生活世界を理解する際に、論理的な熟慮に基づいて一定の意図を込めた表象や明確な主体的行為よりも、その前段階としての日常的な行為遂行 performance の絶え間ない流れに着眼する。さらに、それらの行為を、周囲の状況への反応、環境との相互作用、他者との対話といった「関係性」に基づく存在と捉え、そのような場における人間の身体感覚や直感的理解を重視する³⁶⁾。この立場は、それまでのスリフトが、空間そのものよりは社会の構成や人間の行為に、実質的な関心を寄せてきたこと³⁷⁾を考えれば理解しやすい。

しかしながら、スリフトやその支持者の著作³⁸⁾、あるいは先述のマッシーの空間論³⁹⁾などからは、このような理論的な予察と具体的な事例との対応関係を、厳密に論証しようとする姿勢はほとんど窺えない。一様に紙面の多くを占めるのは、ラトゥールのANTの他、スピノザ、ベルクソン、フーコー、ド・セルトー、ドゥルーズ、ガタリ、デリダなどの哲学者や現代思想家の所論の引用あるいは批判的検討と、哲学的議論から何らかの示唆を得ようとする抽象論であり、地理学や現実の地理空間への志向性は薄い。すべての学問は究極的には哲学に帰着するとはいえ、とりわけ非表象理論が地理学者にとって難解な理由の一つは、そこにある。また、諸論者による「関係性の空間」の説明においても、何と何がいつどのような場所(局面)でどのような関係を結ぶのかという、厳密な具体例の参照がほとんどないため、本書の妖怪文化の実例において、この概念が的確に利用されているか否かについては、実のところ判断が難しい。

以上のような多彩な理論を意識した本書から、我々が汲み取るべきことの一つは、流行の理論と言えども(あるいは流行であるからこそ)熟慮の上で採用を見送るという見識も、時には必要なことである。しかし、他方で汲み取らねばならないのは、神話や伝説の舞台を地名を手掛かりに地図化することで、地理学の面白さを初学者や一般の人々に伝えようとしてきた、著者の長年の熱意である。

図1は、ある大学キャンパス付近の集落の辻(村境)に立てられた、道饗祭の祈祷札である。目下のコロナウイルスもこれで退散願いたいものであるが、著者の著作を長らく精読して道饗祭の存在を学んだ評者は、この辻札に偶然出合った際、千年以上の時空を超えて今に伝わる人々の心情に深く思いを馳せた。

(今里悟之)



図1 福岡市西区太郎丸の辻札
2020年3月に評者撮影。

〔注〕

- 1) 道饗祭とは、災厄をもたらす魔物（本書で言う妖怪）が道路を通過して侵入しようとする地点で、魔物のための饗宴を開いて丁寧に退散を促す儀礼である。
- 2) ①佐々木高弘『神話の風景』古今書院、2014。②同『生命としての景観—彼はなぜここで妖怪を見たのか—』せりか書房、2019。評者による前者の書評は、以下の通りである。③今里悟之「佐々木高弘：神話の風景」地理学評論88A、2015、285-286頁。
- 3) 多くの訳書では「ブルーノ」と表記されているが、本稿では仏語の読み方に近い「ブリュノ」としておく。また、ラトゥールの本意から言えばANTは、サラ・ワットモアが示す通り、アクタントネットワーク理論 Actant-Network Theory と表記するのが妥当であると思われる。Whatmore, S., *Hybrid Geographies: Natures/Cultures/Spaces*, SAGE, 2002, p. 5. アクタント actant とは、人間（一般的にはこれがアクターとされる）と人間以外の双方を動作主（行為体）として捉えるための概念である。

- 4) このrelational spaceの概念は、経済地理学では「相関空間」と訳され、厳密に体系化された理論の重要な一部を成している。①水岡不二雄『経済地理学—空間の社会への包摂—』青木書店、1992、212頁。②Harvey, D., *The Social Construction of Space and Time: A Relational Theory*, *Geographical Review of Japan*, 67B, 1994, p.135.
- 5) 八木康幸『民俗村落の空間構造』岩田書院、1998、117-136頁。
- 6) レイモンド・ウィリアムズ著、小池民男訳『文化とは』晶文社、1985。
- 7) クリス・ロジック著、渡辺潤・佐藤生実訳『カルチュラル・スタディーズを学ぶ人のために』世界思想社、2009、3頁。
- 8) 柳田國男『柳田國男全集6—妖怪談義・一目小僧その他ほか—』筑摩書房、1989。
- 9) Murdoch, J., Actor-Networks and the Evolution of Economic Forms: Combining Description and Explanation in Theories of Regulation, Flexible Specialization, and Networks, *Environment and Planning A*, 27, 1995, pp. 731-757.
- 10) 例えば以下の研究である。①大塚善樹「遺伝子組み替え作物をめぐる環境問題と科学技術の相互的構築」環境社会学研究4、1998、93-106頁。②竹岡志朗・太田雅晴「イノベーション研究におけるアクター・ネットワーク理論の適用可能性」日本情報経営学会誌30-1、2009、52-63頁。③杉原桂太「技術者倫理事例へのアクターネットワーク理論の適用—デンソーにおける環境に配慮したカーエアコンの開発—」技術倫理研究11、2014、105-122頁。
- 11) 簡潔な紹介として、以下の文献がある。①荒木一視・高橋誠・後藤拓也・池田真志・岩間信之・伊賀聖屋・立見淳哉・池口明子「食料の地理学における新しい理論的潮流—日本に関する展望—」*E-journal GEO*, 2, 2007, 52-54頁。②浅野敏久・中島弘二「自然の地理学—自然と社会の二元論を越えて—」（同編『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究5—自然の社会地理—』海青社、2013）、22-25頁。
- 12) ①野尻 亘「日本におけるハラール食品の生産と供給へのアクター・ネットワーク理論応

- 用の試み」人文地理68, 2016, 421-441頁。
 なお、以下の歴史地理学的研究はANTの適用を明示しているが、実際には通常の社会ネットワーク論である。②北崎幸之助「戦後開拓地の変容過程におけるアクターの果たした役割—茨城県南部大八洲開拓農業協同組合地区を例として—」地理学評論75, 2002, 162-164頁。
- 13) ブルーノ・ラトゥール著, 川崎 勝・高田紀代志訳『科学が作られているとき—人類学的考察—』産業図書, 1999, 251-304頁。(原著は1987年)
 - 14) ブルーノ・ラトゥール著, 川崎 勝・平川秀幸訳『科学論の実在—バンドラの希望—』産業図書, 2007, 33-100頁。(原著は1999年)
 - 15) 当該論文が書かれた1986年時点では、アクターactorと表記されている。
 - 16) Latour, B., “The Powers of Association” in Law, J. ed., *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?*, Routledge and Kegan Paul, 1986, pp. 264-280.
 - 17) ブルーノ・ラトゥール著, 川村久美子訳『虚構の「近代」—科学人類学は警告する—』新評論, 2008。(原著の仏語版は1991年, 英訳版は1993年)
 - 18) Callon, M., “Some Elements of a Sociology of Translation: Domestication of the Scallops and the Fishermen of St Briec Bay” in Law, J. ed., *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?*, Routledge and Kegan Paul, 1986, pp. 196-233.
 - 19) Law, J., “On the Methods of Long-Distance Control: Vessels, Navigation and the Portuguese Route to India” in Law, J. ed., *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?*, Routledge and Kegan Paul, 1986, pp. 234-263.
 - 20) この点は、以下の翻訳論文などにも良く窺える。①ミシェル・カロン, ジョン・ロー著, 林 隆之訳「個と社会の区分を超えて—集団性についての科学技術社会論からの視座—」(岡田 猛・田村 均・戸田山和久・三輪和久編著『科学を考える—人工知能からカルチュラル・スタディーズまで14の視点—』北大路書房, 1999), 238-257頁。②ブルーノ・ラトゥール著, 田村真理訳「理性の知らないネットワーク—実験室, 図書館, 収集館—」(同書), 258-277頁。
 - 21) ブリュノ・ラトゥール著, 伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門—』法政大学出版局, 2019, 270頁。(原著は2005年)
 - 22) 前掲12) ①436-440頁。
 - 23) 次の論文が指摘する, ANTの「視野のひろがり」も, 類似の内容を指すと考えられる。足立 明「開発の人類学—アクター・ネットワーク論の可能性—」社会人類学年報27, 2001, 21頁。
 - 24) 農業水利や共有林野を対象にしてきた, 日本の農村社会学などは例外である。コモنزを扱う近年の環境社会学なども同様である。
 - 25) ①千葉徳爾「地域構造図について (一)」地理17-10, 1972, 64-69頁。②同「地域構造図について (二)」地理17-11, 1972, 71-76頁。
 - 26) ANTの事例で描かれたネットワークの各要素は, すべてが対等な関係ではなく, 主導的に事業を遂行する人間(多くの場合は科学者)が必ず存在する。一般にANTの解説では, このことにはあまり言及されず, 次の論考のように, すべてのアクターを対等に捉える「存在論的対称性」が強調される。前掲23) 3頁。
 - 27) ANTの事例分析への適用を試みた地理学の代表例は, 動植物の倫理的問題をめぐるワットモアの研究であろうが, 「異種混濁の地理学hybrid geographies」や「人間以上の生活世界more-than-human life world」などの諸概念を含めた理論的文彩の, 事例分析に対する実質的な有効性に関しては, 現時点での評者は高く評価し得ない。①Whatmore, S., *Dissecting the Autonomous Self: Hybrid Cartographies for a Relational Ethics, Environment and Planning D: Society and Space*, 15, pp. 46-49. ②前掲3)。
 - 28) Murdoch, J., *Post-Structuralist Geography: A Guide to Relational Space*, SAGE, 2006, pp. 19-22.
 - 29) ①Harvey, D., *Justice, Nature, and the Geography of Difference*, Blackwell, 1996, pp. 248-264.

- ハーヴェイの見解は、科学哲学のアルフレッド・ホホワイトヘッドの著作に主に依拠している。さらにハーヴェイの relational space の概念は、科学哲学のゴットフリート・ライブニッツの考え方に依拠しつつ、relative space の概念から発展させたものである。②Harvey, D., *Explanation in Geography*, Edward Arnold, 1969, pp. 191-229. ③Harvey, D., *Social Justice and the City*, Edward Arnold, 1973, pp. 13-14.
- 30) ①Massey, D., *Power-Geometries and the Politics of Space-Time*, Department of Geography, University of Heidelberg, 1999, pp. 27-42. ②Massey, D., *For Space*, SAGE, 2005.
- 31) この点に関しては、地理哲学の多くが絶対空間の概念に依拠しているのに対して、地理学の実際の研究の多くは相対空間の視点を採用しているとする、1969年当時のハーヴェイの見解が示唆的である。前掲29) ②p.209.
- 32) 応地利明「地誌研究と地域研究—認識論的ノート—」(西川 治編『総観地理学講座1—地理学概論—』朝倉書店、1996)、244-245頁。
- 33) Thrift, N., *Non-Representational Theory: Space/Politics/Affect*, Routledge, 2008, p. viii, p. 255.
- 34) 以下の論集が、その代表例である。①Cosgrove, D. and Daniels, S. eds., *The Iconography of Landscape*, Cambridge University Press, 1988. ②Duncan, J. and Ley, D. eds., *Place/Culture/Representation*, Routledge, 1993.
- 35) Wylie, J., "Non-Representational Subjects?" in Anderson, B. and Harrison, P. eds., *Taking-Place: Non-Representational Theories and Geography*, Routledge, 2010, p. 103.
- 36) ①前掲33) p. viii, pp. 147-148, p. 255. ②Anderson, B. and Harrison, P., "The Promise of Non-Representational Theories" in Anderson, B. and Harrison, P. eds., *Taking-Place: Non-Representational Theories and Geography*, Routledge, 2010, pp. 6-8.
- 37) Thrift, N., *Spatial Formations*, SAGE, 1996.
- 38) ①前掲33)。②Anderson, B. and Harrison, P. eds., *Taking-Place: Non-Representational Theories and Geography*, Routledge, 2010. 例えば次の事例研究の実証部分は、読者がある島での滞在や生活で出会うであろう光景を、躍動感溢れる文体で描写することにはほぼ終始しており、一定以上の研究水準を維持しながら非表象理論を適用することの難しさが窺える。③Vannini, P. and Taggart, J., *Doing Islandness: A Non-Representational Approach to an Island's Sense of Place*, *cultural geographies*, 20, pp. 225-242.
- 39) 前掲30) ①, ②。同じ著者の別の著作から、具体例の手掛かりを得るのも一つの方法であろう。①ドリーン・マッシー著、富樫幸一・松橋公治監訳『空間的分業—イギリス経済社会のリストラクチャリング—』古今書院、2000、282-284頁。②ドリーン・マッシー著、加藤政洋訳「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」思想933、2002、40-43頁。